

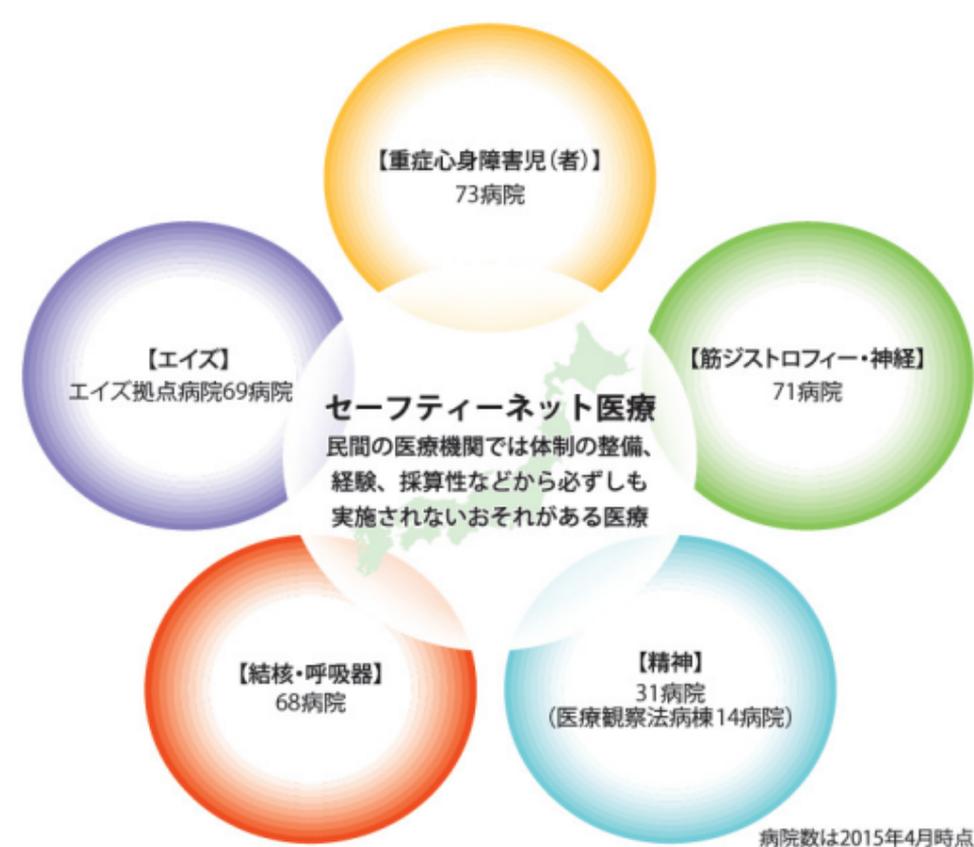
セーフティネット 医療

国民の健康を守る最後の社会的「安全網」

国民のなかには重い病気に苦しむ人がいます。しかし、重症心身障害、筋ジストロフィーを含む神経・筋難病、重い精神疾患、結核、エイズといった医療は、民間の医療機関では必ずしも実施されないおそれがあります。

機構ならではの細やかさ

身近にそういう病気の方がいたらどうしますか。国立病院機構（NHO）は国民の健康を守るため、これらの病気について質の高い経験豊富な医師や看護師をそろえ、全国できめ細かい医療を行っています。



例えば全国に4万人弱いるといわれている重症心身障害児（者）の患者さんは手足が自由に動かさないうえ話すことも困難なので体の向きを変えたい、おなかが減ったと自分で訴えることができません。食事や排泄（はいせつ）には介助が必要ですし、呼吸ができず気管内に食べ物を誤嚥（ごえん）しやすいため、場合によっては気管切開などの高度な呼吸管理も必要になります。

超未熟児や仮死状態などの異常分娩（ぶんべん）で、出生時にNICU（新生児特定集中治療室）で命を救われたものの、人工呼吸器などが必要で何年も退院できない幼児が少なくありません。四国こどもとおとなの医療センター（香川県善通寺市）の中川義信院長＝写真＝は、「国立病院機構はこうした「ポストNICU」の子供たちを積極的に受け入れるようにしています」と話します。



重症心身障害児（者）患者を入院させないで自宅で介護する在宅療養も年々増えていますが、国立病院機構はこうした家族を支援するため、医師や看護師が自宅を定期的に訪問して必要な助言やケアを行っています。患者を施設へ送り迎えして、食事や入浴など日常生活上の介護や基本動作の機能訓練などを行う日帰りのデイサービスもあります。家族の負担を軽くすることにつながりますし、国立病院機構の施設は看護スタッフが充実しているので人工呼吸器など高度な医療的ケアが必要な人も安心して利用できます。

家族の代わりにお世話

在宅患者の症状が悪化したり、介護者の事情で自宅での療養が難しくなった場合には、タイムリーに入院できるように地域の医療機関と連携して受け入れや助言などを行っています。

重症心身障害児（者）患者は入院後の療養期間が長期にわたるので、高齢になった人も珍しくありません。両親はさらに高齢となり、家族が病気をしたときには病院が家族に代わって日常生活の世話をするレスパイト入院といったサポートを行うことも多くなっています。「外国には知的障害だけの施設、運動障害だけの施設はありますが、両方の重度の障害者のための医療施設はありません。国立病院機構の重症心身障害児（者）病棟は世界最先端と言ってもいい水準」と中川院長は胸を張ります。国立病院機構は民間の医療機関ではケアしきれない患者を最後に守る社会的な安全網（セーフティーネット）なのです。